

『躬恒集』 注釈 (十)

平沢竜介・玉木紗也香・西村瑠美子・
渡邊範子・渡辺優子

《ここより底本は歌仙家集本》

初めの冬^は

691 神無月紅葉の色は吹風と滝の水とぞ落^おとはてつる

【他出文献】

右

躬恒

かみなづきもみぢのいろはふくかぜとたにのみづとぞおとはてつる

(延喜五年四月廿八日右兵衛少尉貞文歌合・十卷本・十八)

【通釈】

初冬

十月には紅葉の色は吹く風と滝の水がすっかり落としてしまったことであるよ。

【類歌・参考】

(題しらず)

読人しらず

吹く風の色のちくさに見えつるは秋のこのはのちればなりけり

(古今和歌集・巻五・秋下・二九〇)

池のほとりにてもみぢのちるをよめる

みつね

風ふけばおつるもみぢば水きよみちらぬかげさへそこに見えつつ

(古今和歌集・巻五・秋下・三〇四)

秋のはつる心をたつた河に思ひやりてよめる

つらゆき

年ごとにもみぢばながす竜田河みなとや秋のとまりなるらむ

(古今和歌集・巻五・秋下・三一)

(題しらず)

つらゆき

心もてちらんだにこそをしからめなどか紅葉に風の吹くらん

(拾遺和歌集・巻三・秋・二〇九)

久方ひさかたの雲井みはるかに見みてしより空みに心みはなりにし物を

【他出文献】

平貞文家の歌合に

躬恒

久かたの雲井はるかにみてしより空に心は成りにしものを

(続後拾遺和歌集・卷十一・恋一・六三七)

右勝

久方の雲居はるかにありしより空に心のなりにしものを

(延喜五年四月廿八日右兵衛少尉貞文歌合・十卷本・三八)

【語釈】

詞書 内 本「たひらのさたふんの家のうたあはせに」。久方の「雲井」を導く枕詞。雲井はるかに

底本は「雲井はかりに」。内 本によって校訂する。「雲井」は「はるか彼方」の意と「宮中」の意を表す。

見てしより 底本「あひしより」。内 本によって校訂する。空 「雲井」の縁語。

【通釈】

宮中で遠くはるかにあなたの姿を見てから、私の心は上の空になってしまったことだ。

【類歌・参考】

(題しらず)

じらゆき

逢ふ事はくもぬはるかになる神のおとにききつつこひ渡るかな
(古今和歌集・卷十一・恋一・四八二)

(題しらず) (よみ人も)

秋風にさそはれわたる雁がねは雲ぬはるかにけふぞきこゆる
(後撰和歌集・卷七・秋下・三五五)

(題しらず) 曾禰のよしただ

かりがねの帰るをきけばわかれぢは雲井はるかに思ふばかりぞ
(拾遺和歌集・卷六・別・三〇四)

元輔がむこになりて、あしたに 藤原実方朝臣

時のまも心はそらになるものをいかですくしし昔なるらむ
(拾遺和歌集・卷十四・恋四・八五〇)

天徳四年内裏歌合によめる 中務

きみこふるころはそらにあまのはらかひなくてゆく月日なりけり
(金葉和歌集三奏本・卷七・恋・三六三)

693 寝もやすく寝られざりけり春の夜は花の散るのみ夢に見えつゝ

【他出文献】

(題しらず) 凡河内躬恒

いもやすくねられざりけり春の夜は花のちるのみ夢に見えつつ
(新古今和歌集・卷二・春下・一〇六)

右 興風

いもやすく寝られざりけり春の夜は花の散るのみ夢にみえつつ

(延喜十三年三月十三日亭子院歌合・廿卷本・一八)

【語釈】

寝もやすく寝られざりけり 安らかに寝ることもできないことだ。

【通釈】

安らかに寝ることもできないことだ。春の夜は、桜の花が散るのばかりがしきりに夢に見えて。

【類歌・参考】

山でらにまつでたりけるによめる

(つらゆき)

やどりして春の山辺にねたる夜は夢の内にも花ぞちりける

(古今和歌集・卷二・春下・一一七)

うつくにはならにもいはしきくらはな夢にもちると見えはつからん

(躬恒集・五四)

694 深山出てまつ初声は郭公夜深く待たむ我宿に鳴け

【他出文献】

亭子院歌合に

在原元方

みやまいでんまづはつ声は時鳥夜ぶかくまたんわが宿になけ

(続千載和歌集・卷三・夏・二二七)

左勝

雅固

深山出でてまづ初声は郭公夜深く待たむわが宿に鳴け

(延喜十三年三月十三日亭子院歌合・廿卷本・四一)

【語釈】

深山出でてまづ初声は 第五句「我宿に鳴け」にかかる。夜深く待たむ 夜遅くまで寝ずに待っている。

【通釈】

深山を出てまず鳴く初声は、郭公よ、夜遅くまで寝ずに待っている私の宿で鳴いて欲しい。

【類歌・参考】

題しらす

よみ人しらす

はつこゑのきかまほしさに郭公夜深くめをもさましつるかな

(拾遺和歌集・卷二・夏・九六)

天曆御時歌合に

坂上望城

髣髴にぞ鳴渡るなる郭公み山をいづるけさのはつ声

(拾遺和歌集・卷二・夏・一〇〇)

(天曆御時歌合に)

平兼盛

み山いでて夜はにやきつる郭公暁かけてこゑのきこゆる

(拾遺和歌集・卷二・夏・一〇二)

かもにこもりたりけるあか月、郭公のなきければ

弁乳母

ほととぎす深山いづなるはつこゑをいづれのやどのたれか聞くらん

(新古今和歌集・卷三・夏・一九二)

695

紫にあふむね水なれやかきつばた底の色さへか変はらざるらん

【他出文献】

左

紫にあふ水なれや杜若底の色さへたがはざるらん

(延喜十三年三月十三日亭子院歌合・十卷本・四五)

【語釈】

あふ 互いによく釣り合う。調和する。似合う。

【通釈】

紫の色に相性の良い水だから、かきつばたの姿が映っている水底の色までかわらないのだろうか。

【類歌・参考】

よしの河のほとりに山ぶきのさけりけるをよめる づらゆき

吉野河岸の山吹ふくかぜにその影さへうつるひにけり (古今和歌集・卷二・春下・二二四)

おほさわの池のかたにきくうゑたるをよめる とものり

ひともどと思ひしきくをおほさわの池のそこにもたれかうゑけむ (古今和歌集・卷五・秋下・二七五)

いづみのくににまかりけるに、うみのつらにて よみ人しらず

はる深き色にもあるかな住の江のそこも緑に見ゆるはま松 (後撰和歌集・卷三・春下・一一一)

延喜御時御屏風に、水のほとりに梅の花見たる所 づらゆき

梅の花まだちらねどもゆく水のそこにつづれるかげぞ見えける (拾遺和歌集・卷一・春・二五)

696 我が聞^きて人には告^つげん時鳥^{おと}思^{おも}ふもしるくまづこゝに鳴^なけ

【他出文献】

延喜五年、内よりおほせ事によりてたてまつりける屏風歌に

躬恒

われききて人にはつげんほととぎす思ふもしるくまづこゝになけ (玉葉和歌集・卷三・夏・三〇八)

左勝

躬恒

われ聞きて人には告げむ郭公おもふもしるくまつ此処に鳴け

(延喜十三年三月十三日亭子院歌合・十卷本・四七)

【語釈】

詞書 内本「延喜五年うちよりおほせことによりてたてまつりけるひやつふのうたに」。思ふもしるく
思つた通り。

【通釈】

私が聞いて人に告げよう。時鳥よ私が思つた通りまずここで鳴いておくれ。

【類歌・参考】

権少将

うゑおきしこずゑの梅の春風をおもふもしるくきゐるづくひす (拾遺愚草員外・春・雑・二九八)

元永元年十月内大臣家歌合、初雪 藤原宗国

夜を寒み越のねわたしさえさえておもふもしるしけさの初雪 (夫木和歌抄・卷十八・冬三・七一六二)

697 恋
涙河いかなる水か流るらんなど我恋を消つ人のなき

【他出文献】

延喜十三年亭子院歌合に、恋をよめる

躬恒

涙川いかなる水かながるらむなどわが恋をけつ人のなき
なみだがはいかなるみづかながるらむなどわがこひをけつときのみなき
(新拾遺和歌集・卷十一・恋一・九三八)
(古今和歌六帖・卷四・二〇八二)

右

涙川いかなる水か流るらむなどわが恋を消つよしもなき
(延喜十三年三月十三日亭子院歌合・廿卷本・六〇)

【語釈】

詞書 内本「延喜十三年ていじぬんのうたあはせにこひをよめる」。流るらん 内本「ふかゝらん」。
消つ 消す。

【通釈】

恋

涙河はどのような水が流れているのだろう。どうして私の恋を消す人がいないのか。

涙がとめどなく流れるが、その涙は私の恋の思ひ（火）を消してくれない。

【類歌・参考】

（題しらず）

きのめのと

ふじのねのならぬおもひにもえばもえ神だにけたぬむなしけぶりを（古今和歌集・卷十九・雑体・一〇二八）

返し

きのめのと

ふじのねのもえわたるともいかがせむけちこそしらね水ならぬ身は（後撰和歌集・卷十・恋二・六四八）

夏夜恋といふ心をよみ侍りける

按察使兼宗

夏虫もあくるたのみのあるものをけつ方もなきわがおもひかな（新勅撰和歌集・卷十五・恋五・九八一）

698 誰たれにより思おもひ乱みだるゝ心こころとも知らぬぞ人のつらきなりける

【他出文献】

延喜十三年亭子院歌合に

躬恒

たれによりおもひみだるゝこころぞとしらぬぞ人のつらさなりける（続古今和歌集・卷十一・恋一・九四五）

左勝

躬恒

誰ゆゑに思ひみだるる心ぞは知らぬは人のつらきなりける（延喜十三年三月十三日亭子院歌合・廿卷本・六一）

【語釈】

詞書

内本「延喜十三年ていしめんうたあはせに」。

「心とも」

内本「心ぞと」。

「つらきなり

ける」

内本「つらさなりける」。「つらき」は、「冷淡だ」「薄情だ」の意。

【通釈】

誰のせいで思い乱れる心とも知らないのが、あの人の薄情さであることよ。

【類歌・参考】

題しらず

よみ人しらず

あまのかるもにすむむしのなはきけどただ我からのつらきなりけり

（拾遺和歌集・卷十五・恋五・九八七）

人のもとにつつせみをやるとて

京極前関白家肥後

なつやまのこすゑにとまるつつせみのわれから人はつらきなりけり

（続後撰和歌集・卷十四・恋四・九一二）

（恋歌の中に）

小式部内侍

かねてより思ひしことのかはらぬはほどなく人のつらきなりけり

（新千載和歌集・卷十四・恋四・一四七六）

699 人のうへと思ひし物をわが恋になしてや君がつれなかるらん

【他出文献】

左勝

躬恒

人の上と思ひしものをわが恋になしてや君がただにやみぬる

(延喜十三年三月十三日亭子院歌合・十卷本・六四)

【語釈】

人のうへ 人の身の上。 わが恋になして 底 本「わがこひはなして」。亭子院歌合の本文によって校訂する。私の恋にして。

【通釈】

人の身の上のことと想っていたのに、私の恋にしてみたら、どうしてあなたは薄情なのだろう。つれなくされる恋は人の身の上のことと想っていたのに、自分の身の上を起こるとは。

【類歌・参考】

つらくなりにける人につかはしける

伊勢

いかでかく心ひとつをふたしへにうくもつらくもなしてみすらん

(後撰和歌集・卷九・恋一・五五五)

女五のみこに

忠房朝臣

君がなの立つにとがなき身なりせばおほよそ人になしてみまじや

(後撰和歌集・卷十二・恋四・八八〇)

700

うつゝにも夢にも人に夜し逢へば暮行ばかりうれしきはなし

【他出文献】

(題しらず)

(よみ人しらず)

うつつにも夢にも人によるしあへばくれゆくばかりうれしきはなし

(拾遺和歌集・卷十二・恋・七二五)

うつつにもゆめにも人によるしあへばくれゆくばかりうれしきはなし

(古今和歌六帖・卷四・二二四二)

左

躬恒

現にも夢にも人に夜し逢へば暮れゆくばかりうれしきはなし

(延喜十三年三月十三日亭子院歌合・十卷本・六六)

(天曆御時歌合)

(読人不知)

うつつにもゆめにも人によるしあへばくれ行くばかりうれしきはなし

(拾遺抄・卷七・恋・二六六)

【通釈】

現実でも夢でも恋しい人に夜逢うので日が暮れていくほど嬉しいことはない。

【類歌・参考】

業平朝臣の伊勢のくににまかりたりける時、斎宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人

やるすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける（よみ人しらず）

きみやこし我や行きけむおもほえず夢かうつつかねてかさめてか（古今和歌集・卷十三・恋三・六四五）

（題しらず）
こまち

うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人めをよくと見るがわびしさ（古今和歌集・卷十三・恋三・六五六）

（題しらず）
（よみ人しらず）

世中は夢かうつつかうつつとも夢ともしらず有りてなければ（古今和歌集・卷十八・雑下・九四二）

するがのくにうつの山にあへる人につけて、京につかはしける 業平朝臣

するがなるつつの山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり（新古今和歌集・卷十・羈旅・九〇四）

霧のうちの深山がくれの紅葉葉は日の光にぞ色は見えける

【他出文献】

ナシ

【語釈】

深山がくれ 山深く隠れていること。山の深い所。

【通釈】

霧の中の山深くに隠れている紅葉の葉は日の光で色が見えることだ。

「日の光」に帝などを寓意するか。

【類歌・参考】

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

(つらゆき)

吹く風と谷の水としなかりせばみ山がくれの花を見ましや

(古今和歌集・卷二・春下・一一八)

家に歌合し侍りけるに、紅葉を

修理大夫顕季

色ふかきみやまがくれの紅葉はをあらしの風のたよりにぞみる

(続千載和歌集・卷五・秋下・五七九)

702 浪た^たば沖^{おき}の玉藻もより来^くべく思^{おも}ふかたより風も吹^ふかなん

【他出文献】

(題しらず)

躬恒

浪たたばおきの玉藻もよりくべくおもふ方より風はふかなん

(玉葉和歌集・卷十五・雑二・二二〇六)

【語釈】

より来べく 寄つて来るように。 風も吹かなん 内 本「かぜはふかなん」。

【通釈】

波が立つたら沖の玉藻が寄つて来るように、思つ方から風が吹いて欲しい。
何らかの寓意のある歌か。

【類歌・参考】

和歌所にて、おのこどもたびの歌つかうまつりに 定家朝臣

そでにふけさぞなたびねの夢はみじ思ふかたよりかよふ浦かぜ (新古今和歌集・卷十・羈旅・八四二)

(題しらず)

源邦長朝臣

秋風はおもふかたより吹きそめてみやこ恋しきしらかはの関

(続千載和歌集・卷八・羈旅・八四二)

人人に三十首歌めされける次に、おなじ心をよませたまつける
花園院御製

あま人のもしほの煙なびくやと思ふかたより風もふかなん

(新千載和歌集・卷十一・恋一・一一一八)

《ここより底本は内閣文庫本》

703 暮て又明日とだになき春の日を花のかけにて今日は暮さん

弥生の晦日

【他出文献】
やよひのつごもり

みつね

くれて又あすとだになきはるの日を花の影にてけふはくらさむ

(後撰和歌集・卷三・春下・一四五)

【語釈】

○明日とだになき 明日さえもない。

【通釈】

三月の末日

暮れてまた明日という日さえない春の日だから、花の木の下で今日は暮らそう。

【類歌・参考】

亭子院の歌合のはるのはてのうた

みつね

けふのみと春をおもはぬ時だにも立つことやすき花のかけかは

(古今和歌集・卷二・春下・一三四)

百首歌たてまつりける時

後深草院弁内侍

なごりをばゆふべの雲にとどめ置きてあすとだになき秋のわかれぢ

(新後拾遺和歌集・卷五・秋下・四五八)

今日くれてあすとたになきはるなればたまくをしき花のかけかな

(躬恒集・一三三)

すがた すがた 姿あやしと人の笑ひければ

704 伊勢の海のつりのつけなるさまなれど深き心は底に沈めり

【他出文献】

すがたあやしと人のわらひければ

伊勢の海のつりのうけなるさまなれどふかき心はそこにしづめり

(後撰和歌集・卷十五・雑一・一〇八五)

【語釈】

つりのうけ 「うけ」には漁具の「浮子」に「憂げ」を掛ける。

【通釈】

姿がみすぼらしいと人が笑ったので

伊勢の海の釣のうけのように憂げ(嫌)な様子ではあるけれど、私の深い心は海の底に沈んでいることです。
姿はみすぼらしくとも心は深い。

【類歌・参考】

(題しらす)

伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる

(古今和歌集・卷十一・恋一・五〇九)

千首歌たてまつりし時、寄海述懐

中務卿宗良親王

伊勢のうみにしづまはしづめ身のはてよつりのうけなるさまもつらめし

(新葉和歌集・卷十六・雑下・一二七三)

題しらす

705 手をふれで惜しむかひなき藤花底にうつれば波ぞ折りける

【他出文献】

題しらす

躬恒

手もふれでをしむかひなく藤の花そこにうつれば浪ぞをりける

(拾遺和歌集・卷二・夏・八七)

【通釈】

題しらす

手をふれないで惜しむかひのない藤の花であることよ。水の底に映ると波が折ることだ。

【類歌・参考】

題しらす

よみ人しらす

ちりぬればこふれどしるしなきものをけふこそさくらをらばをりてめ
(古今和歌集・卷一・春上・六四)

(題しらす)

(よみ人しらす)

まつ人もこぬものゆゑにつぐひすのなきつる花ををりてけるかな
(古今和歌集・卷二・春下・一〇〇)

やよひのつこもりの日 あめのふりけるに

ふぢの花ををりて人につかはしける

なりひらの朝臣

ぬれつつぞしひてをりつる年の内に春はいくかもあらじと思へば

(古今和歌集・卷二・春下・一三三)

題しらず

(つらゆき)

手もふれで月日へにけるしらま弓おきふしよるはいこそねられね

(古今和歌集・卷十二・恋二・六〇五)

亭子院歌合に

706 三千年みちとせになるてふ桃ももの今年ことしより花開春さくに逢あひにける哉

【他出文献】

亭子院歌合に

みつね

みちとせになるてふもものことしより花さく春にあひにけるかな

(拾遺和歌集・第五・賀・二八八)

亭子院歌合に

(読人不知)

みちとせになるてふもものことしよりはなさく春にあひぞしにける

(拾遺抄・第五・賀・一八四)

右

是則

三千代へ経へてになるてふ桃ももは今年ことしより花咲はなく春にあひぞしにける

(延喜十三年三月十三日亭子院歌合・十卷本・六)

みちとせになるてふもものことしより花咲く春になりぞしにけるこ

(古今和歌六帖・第一・五八)

おなしうたあはせに もゝ

みちとせになるてふもゝのことしよりはなさく春にあひにけるかな

(是則集・六)

三月三日、或所にてかはらけとりて

三千歳へてなるてふ桃のことしより花さくはるになりにけるかな

(忠岑集・四八)

三月三日あるところにてかはらけとりて亭子院のうた合とも

みちよへてなるといふもゝはことしよりはなさくはるになりそしにける

(忠岑集・七七)

三月三日、ある所にて

三千代へてなるてふ桃のことしよりはなさくはるになりにけらしも

(忠岑集・一一)

三月三日、あるところにて、ゝいしのみんのうたあはせのうたとも

みちよへてなるてふもゝのことしよりはなさくはるにあひそしにける

(忠岑集・一四九)

【語釈】

三千年になるてふ桃 仙人の世界にあつて、三千年に一度花を開き実を結ぶ桃。中国の漢の武帝が西王母からこの桃を買った故事がある。

【通釈】

亭子院歌合に

三千年に一度なるという桃が、今年から花をつけるめでたい春に巡りあったことだ。
上皇の主催する歌合の場を神仙郷と見なし、その歌合に歌を詠進することができた喜びを表す。

【類歌・参考】

三月三日もものはなをご覧して

花山院御製

みちよへてなりけるものをなごてかはももとしもはたなづけそめけん (後拾遺和歌集・巻二・春下・二二八)

もゝのはなをんなのもとのおるところ

君がためわかおる花は春とをく千とせ見たるを折りつゝそさく (貫之集・一七六)

天曆御時御屏風にもものはなあるところをよめる 清原元輔

あかざらばちよまでかざせもものはなもかはらじはるもたえねば (後拾遺和歌集・巻二・春下・二二九)

707 かのあかのあかにあか萩あかかるあか男あか縄あかをあかなあかみあか練あかるあかやあかねあかりあかそのあかくあかだあかけあかてあかぞあか思あかふ

【他出文献】

(題しらず)

躬恒

かのをかにはぎかるをのこなはをなみねるやねりそのくだけでぞ思ふ (拾遺和歌集・卷十三・恋三・八一三)

【語釈】

ねりその 「ねりそ」は木の枝・つるなどをねじり合わせて縄の代わりとしたもの。初句から「ねりその」までが序詞で、ねりそを練るとその材料がくだれることから、「くだけで」(思い乱れて)を導く。

【通釈】

あの岡で萩を刈り取っている男は、縄がないので、ねりそを練っているが、そのねりそがくだれるようにくだけで(思い乱れて)物を思うことだ。

【類歌・参考】

だいしらず

藤原義孝

みやまぎをねりそもてゆふしづのをはなほこりずまの心とぞみる (後拾遺和歌集・卷十八・雑四・一〇五一)
かくて世をあやふげにてもすぐすかなかこふかきほのねりそくちつ (新撰和歌六帖・第二帖・七九八)

牆根梅花といふことを

大宰権帥経信

むめがえはねりそもてゆふかきねにもあはれやつれずにほふなりけり
(万代和歌集・卷一・春上・一一五)

ねりそのつな
道因法師

みや木ひくねりそのつなのももがらみよわるけしきもみえぬ君かな

(夫木和歌抄・卷三十三・雑十五・一五八九〇)

708 初雁の羽風すゞしくなるなへに誰か旅寝の衣かへさぬ

【他出文献】

(だいしらず)
凡河内躬恒

はつかりの羽かぜすゞしくなるなへにたれか旅ねの衣かへさぬ
(新古今和歌集・卷五・秋下・四九九)

【語釈】

なへに ……と共に。……と同時に。……につれて。 衣かへさぬ 衣をかえすと恋しい人を夢に見られるという俗
信によぬ。

【通釈】

初雁の羽がおこす風が涼しくなると共に恋しい人を夢に見たくて旅寝の衣をかえさない人がいようか。

【類歌・参考】

つぐひすのなくをよめる

そせい

こづたへばおのがはかせにちる花をたれにおほせてこころなくらむ

(古今和歌集・卷二・春下・二〇九)

(題しらず)

紀友則

とびかよふをしのはかせのさむければ池の氷ぞさえまさりける

(拾遺和歌集・卷四・冬・二三三)

後冷泉院の御時后の宮の歌合によめる

伊勢大輔

さよふかくたびのそらにてなくかりはおのがは風やよさむなるらん

(後拾遺和歌集・卷四・秋上・二七六)

(題しらず)

(よみ人しらず)

ひぐらしのなきつるなへに日はくれぬと思ふは山のかげにぞありける

(古今和歌集・卷四・秋上・二〇四)

(題しらず)

(よみ人しらず)

わがかどにいなおほせどりのなくなへにけさ吹く風にかりはきにけり

(古今和歌集・卷四・秋上・二〇八)

